

# 審判員と指導者、 ともに手を取り合って…

▶シャツの裾出し禁止を解除 松崎康弘（JFA 審判委員会委員長）



(c) Jリーグ フoto

1863年にThe FA（イングランドサッカー協会）が設立し、現在のサッカーが生まれた。この頃のイングランドのパブリックスクールの絵があって、そこには制服のままフットボール（サッカー）をしている生徒の姿が描かれている。他校や他クラブとの対戦だったら、味方、相手の識別のために何らかのユニフォームを着用していたのだろうか。

競技の運営が制度化され、プロのサッカークラブが登場してくる。その頃の写真を見ると、機動的に動けるようにと、ズボンは膝のところまでのものになり、相手との接触による擦過傷を防ぐためにストッキングが着用されている。これが今のサッカーのユニフォームの原型。上からジャージー（シャツ）。ジャージーとは襟がついているもの、シャツは襟がないもの。どちらも着用することができる。真ん中がショーツ（サッカーパンツ）。GKはトラウザー（ズボン）をはくことが許されているが、フィールドプレーヤーはショーツのみ。そして、ストッキング（ソックス）。

素材の革新、服飾感覚の変化により、現在のカラフル、ファッショナブルな、そして軽さや、汗の付着感が少ないものになっていくが、この上・中・下のセットは基本変わらない。

2002年のアフリカネーションズカップでカ梅ルーン代表が、袖なしのシャツを着用した。しかし、「袖なしのシャツはサッカーのシャツではない」と国際サッカー評議会は判断。2002年からジャージー（シャツ）には袖が必要になると競技規則に明記された。夏は暑いので袖をまくってプレーすると、審判が

「袖を下ろして」と言うのは、この理由による。

同じくカ梅ルーン代表、今度はシャツとショーツが一体になったワンピースにして、2006年のFIFAワールドカップ予選に出場した。これもサッカーのユニフォームとしては考えられない。2006年の競技規則に“競技者が身につけなければならない基本的な用具は、次の個別のものとなる。ジャージー（またはシャツ）、ショーツ……”と明記された。

それでは、シャツの裾は？

日本国内ではこれまで、ユニフォームの「シャツの裾をパンツの中に入れてプレーしなければならない」としてきた。裾が出ていると審判も注意していた。というのも、かつては、ワールドカップでも大会規定に裾出し禁止とされていたし、競技規則の付属書（追加指示）にもそう書かれていた。

その後、これらの規定はなくなり、2006年のFIFAワールドカップドイツ大会になるとシャツを出している選手が多く見られた。「裾出しはOK？ 禁止？ 一体どちらが正しい？」という意見が寄せられた。そこでそれまでの考え方を踏襲し、2006年に裾出し禁止の徹底をあらためて通達した。

しかし、2010年のFIFAワールドカップでは、シャツを出すことが普通のことになっていた。今ではFCバルセロナのリオネル・メッシも、ボルシア・ドルトムントでの香川真司もシャツの裾出しを気にしていない。シャツの長さも短くなっている。試合中出てしまうこともあるし、シャツが出ていても、特に見苦しさは感じ

られない。

さらに言うのであれば、服飾（ファッショング）感覚も変化してきた。日常生活でもポロシャツの裾出しも普通になってきている。“夏は少しでも風通しを良くしたい”という声も聞こえる。

時代とともに考え方が変わってきた。

例えば、小学生などでシャツがあまりに大きく、裾に引っ掛かり、転倒も考えられるというのであれば、それは危ない。裾出しは認められない。けれども見苦しくなく、安全が確保されるということであれば、競技規則上規定されていない以上、審判が言及することはない。この2月末に“2006年の通達を撤廃した”という通達を出した。

もし、裾出しの全面解除にはまだコンセンサスを得られないというリーグ（連盟）があるのなら、経過措置をとるなり、そのリーグ（連盟）で裾出し禁止解除を延期することは問題ない。ただ審判が注意することはないで、しっかりとリーグ（連盟）でその措置が生きてくるように対応する必要がある。

ちなみに、競技規則に審判の服装についての規定はない。唯一、「競技規則の解釈と審判員のためのガイドライン」に、“審判員も装身具を身に付けることはできない（時計や試合時間を計測する同様の機器は除く）”とあるだけだ。かつては、フロックコートを着ていたという審判の服装も、今は選手と同じく袖のついたジャージー（シャツ）、ショーツ、ストッキング。ただ、そこに加えて、審判に限っては、“シャツの裾出しはなし”とお願いしたい。